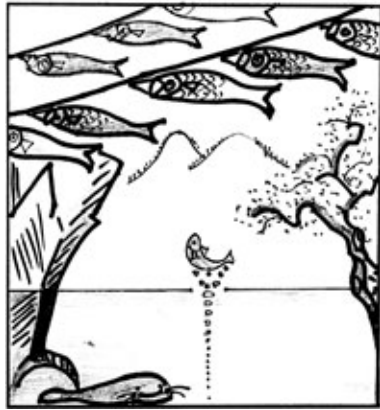


みんなの童話

といのぼり



山里を流れる谷川の岸にもよ
うやく春がやってきた。淵の中
に住む鯉も、川底までさしこむ日射
に春を感じた。寒くて長い冬を淵
の底ですごした鯉は、岸の春が
見たくなった。

尾びれを振り身体をくねらせる
と鯉は川底から一気に水面を突き
破ってジャンプした。

山側の岸の大きな岩、反対側の
土手の満開の桜、新しい芽を出し
た岸辺の木や草花達、十年前、二
十年前とも変らぬ美しい春の風景
に鯉は満足だった。

背びれを突き出し浅くゆったり
と泳ぐ鯉はふとゆらぐような影を
感じて空を見上げた。そしてゆう
ぜんと泳ぐ巨大な鯉の群れを見つ
けた。

「私より何倍もありそうなあの鯉

たちはいったい何者なのだ」

群れをなし、何列も並んで泳ぐ
巨大な鯉に川の鯉はびっくり、い
そいで川底にもぐると穴倉に住む
なまずの長老に聞いた。

「はっはっはっ、鯉さんもおどろ
いたかね。あれは鯉のぼりといっ
てな、男の子もががいる家の庭で
泳いでいたんじゃよ」

「ほう、大きな池のある家じゃの
う」

「いやいや、あの鯉は空で泳ぐの
じゃよ。背の高い棒の先に付ける
と上手に泳ぐのじゃよ」

「そういえばさっき見た鯉はずい
ぶん高いところで泳いでいるから
何か変だとは思ったがのう」

「わたしらなまずとちがってな、
鯉はめでたい魚でな、人間に大切
にされてきたんじゃよ」

「わたしたちがなぜめでたいのか
のう」

「それはな、まずは長生き、次は
滝をも登る強い力、そして姿の美
しいことかのう」

「なまずさんや、うれしいことを
いってくれるのう」

「男の子が生まれた家ではのう、
きそって大きな鯉のぼりを上げた
もんじゃ」

なまずの長老は物知り博士、な

んでも知っている。

「なまずさん、そんなにめでたい
大切な鯉のぼりがどうして川の上
で泳ぐことになったのかのう」

なまずの長老は、人間の世界は
子どもがへって山里では老人ばか
りなのだ話した。

「そういえば、夏になって子どもど
もたちが泳ぎにくくなったの
う」

何十年も淵に住む鯉がいった。

「子どもたちの巣立った家の鯉の
ぼりは物置の箱に入れられたまま
じゃよ」

「都会の孫に送ればよからうのう」

「いやいや、都会の家には広い庭
などないし長い棒もな」

「そうかそうか。ピルの谷間では
鯉のぼりはむりじゃのう」

「ところがな、ある町で物置の鯉
のぼりをいっぱい集めて川の上で
およがせたんじゃ」

「おお、それは良いことを思いつ
かれた。わたしは箱に入れられた
ままの鯉のぼりさんがかわいそう
に思えたんじゃ。鯉の仲間じゃか
らのう」

鯉となまずの話はつきない。

「お父さん、早くきてここに
鯉のぼりが泳いでるよ」

久し振りに元気な子ども
だ。鯉は水面近くで耳をすました。

「ここだここだ。父さんが子ども

のころ泳いだところだ。大きな鯉
がいたなあ」

この淵に長く住む鯉はわたしし
かない。わたしのことをおぼえ
ていてくれたと、鯉はうれしかっ
た。

「ねえお父さん、♪屋根より高い
鯉のぼり♪とうたうけど何かへん
だね」

「どうして、鯉のぼりは家の庭で
屋根より高く上げるものだよ」

「うそだよ。今日自動車の窓から
ずうっと外を見てたけど、川
の上で泳ぐのは何回も見たけど、屋
根の上で泳ぐのは一っぴきも見な
かったよ」

「はっはっはっ、そうだねえ、ち
かごろは庭の高い棒の上よりも川
の上で何びゃっぴきが群れで泳ぐ
のがふつづになったねえ」

親子の楽しそうな話し声を聞い
て鯉はうれしくなった。

「そうか、明日は子どもの日だ。
あの親子も町からいなくなに住むじ
いちゃんばあちゃんに、あいにき
てくれたんじゃな。よかったの
う。」

鯉はくいつと尾びれを振ると、
ゆったりと川底に向って泳ぎ始め
た。

しろやま会員 ヒビノ トクスケ